

卵巣のう腫

卵巣が何かしらの原因で大きくなっている病態を卵巣のう腫と呼びます。卵巣のう腫はその中身によって対応方法は変わります。

卵巣のう腫とは

卵巣のう腫は、何かしらの原因で卵巣が大きく腫れている病態を指します。一応正式な病名ですが、さらに内容の種類によって名称が細かく分かれています。全ての卵巣のう腫には癌化する可能性があるため定期的な診察が必要です。診察には経膈超音波検査とMRI画像検査が有効です。

卵巣のう腫の種類

・ チョコレートのう胞(子宮内膜症性のう腫)

子宮内膜症が卵巣内に存在する状態で、生理を経るたびに徐々に大きくなっていきます。生理痛や不妊症の原因となります。閉経後はのう腫は小さくなる事が多いですが、大きなのう腫だと将来癌化のリスクが増加してしまうので、手術による摘出も検討が必要です。

・ 奇形腫(成熟のう胞性奇形腫)

のう腫内に脂肪成分や骨、髪の毛などが存在し、徐々に大きくなる病気です。胎児期に将来様々な組織になる細胞が、卵巣内に入り込んでしまう事が原因と言われており、基本的に自然に小さくなることはありません。この卵巣のう腫はお腹の中で捻れてしまう(捻転)事が多く、捻転が起こった場合は急激な腹痛や対処が遅れた場合、卵巣が壊死(腐ってしまう)することもあるので、5cmを超えるものについては手術を勧めます。

・ その他の卵巣のう腫

他にも漿液(しょうえき)が溜まる漿液性腺腫、同じく粘液が貯留する粘液性腺腫など、様々な卵巣のう腫が存在します。これらののう腫については、手術により摘出してみないと良性・悪性の判断がつかない事が多いため、診察で発見した時点で他施設への紹介を行います。

・ 傍卵巣のう腫

卵巣のう腫では無いですが、卵巣の横に水が溜まってしまう病気です。溜まる液体は排卵時の卵胞液であることも多く、低用量ピルの一時的な内服により軽快することもあります。